

マスク

2023. 11. 21

3年前に野田中学校にきたときには、全員がマスクをしていた。以前から知っている先生方でも一瞬、本人かどうか判断できなかった。声をかけにくかった。マスクをしていない顔はわかるが、半分隠れたマスクの顔には慣れていない。

全員の生徒の顔と名前を覚えるのが、校長としての一番の生徒指導だと教わってきた。そのつもりでいた。だが、現実には厳しかった。下半分がマスクに覆われ、目元と髪型で人を覚えるのは、容易ではない。今までに経験しなかったことである。

この状態が当たり前になっていった。慣れてくると、不思議なもので徐々に人の顔を覚えていった。しかし、本当の顔ではない。以前よりも、目を見るようになった気がする。目は口ほどにものを言う。その通りである。

令和4年度卒業式での校長式辞では、ノー原稿ではあるが、全く予定にはないことを話してしまった。「最後に3年生一人一人の顔を見ることができてうれしいです」この日に限っては、卒業する3年生には、マスクを外して参加してもらっていた。

今年の4月からは、いよいよマスクを外すぞと意気込んでいた。だが、4月3日の初日にマスクを外してきたのは、生徒が1人、教職員では私だけだった。「おやっ」かなり予想と違った。これが現実だった。

その後も、マスクを外す生徒は増えてはいかなかった。教職員も同様である。さすがに暑くなってくれば外すだろうと思っていた。だが、意外と外さなかった。そうこうするうちに、秋になり、気温の低下とともに、マスクに戻る生徒が増えていった。

夏の間考えた。生徒がマスクを外してくれるのはいいのだが、今まで覚えたものが役に立たない。マスクを外すと、人の印象はだいぶ変わる。もう一度、改めて覚えなければならない。これは、コロナ禍になってから出会った大人でも同じである。マスクを外すと、一瞬本人かどうか躊躇するときがある。相手は、私のことを認識している。何だか、相手に対して失礼な感じになる。

以前、知り合いの先生から、こんなことを教えられた。「うちの校長先生は、全員の生徒のことがわかるんです」その学校は、600人くらいは生徒がいる学校だった。そのときは、「そうか、すごいなあ。自分も校長になったらやってみるか」と密かに思ったことを覚えている。

そのチャンスが目の前にある。にもかかわらず、マスクに阻まれている。マスクに負けている。これではいけない。きっと前述の校長先生は、単純に名前と顔を覚えることに長けているのではないだろう。その生徒は、何をやっていて、どんな生徒なのか。一人一人のことがわかるのではないだろうか。600人分のデータが頭に入っているのであろう。以前、高校の校長をしていたときには、「私は全クラスの副担任、全ての部活動の副顧問のつもりです」などのようなことを言っていた。感覚としては、そういうことなのだろう。

現在の私はというと、副担任、副顧問いずれも程遠い。これでは寂しい。今一度、原点に戻って生徒の顔ではなく、生徒のことを理解しようと思う。マスクは関係ない。今年度の卒業式では、「卒業する3年生の皆さんとは、3年間一緒に過ごしました。皆さん一人一人のことがよくわかりました」と言えるようにしたい。